

巻 頭 言

新型コロナ-ウイルスの大流行が始まってから、1年半（8月段階で）が過ぎようとしています、ワクチン接種の拡大や治療薬の開発が進みながらも、世界の総感染者数が2億人に達するなどコロナ禍の勢いは抑えられていません。そうした中で、非常事態宣言が出されている都道府県がある状況下においてオリ・パラが開催され、また、感染症者数の急拡大による医療機関の逼迫が伝えられるなど、いくつかのちぐはぐ感が生じていますが、会員の皆様におかれましては、それにもめげず元気にお過ごしのことと存じます。

さて、というわけでありまして今年度の大会も残念ながらオンライン方式での開催ということになりました。ただ、今回は第30回という記念すべき大会にふさわしいパネルディスカッションを準備することができました。副会長の小西範幸会員が座長となり、「SDGsが求める経済社会と人材育成」のテーマで実施することになりました。本会は、総合科学研究をめざし、多くの分野の専門家が集う学会でありますので、持続可能な開発目標の在り方とその目標の実現に向けての議論に参加していただき、実りある成果を出していただきたいと思います。

私事ではありますが、役員会も対面では行なえず、「メール投票」形式での合意形成をせざるを得ないという、これまでの人類の獲得してきた文化・常識が通用しない現実に辛い思いで対応しております。役員会の終了後の飲み会も「過去の体験」と化しつつあります。見方を変えれば恐ろしい事とも言えます。これは、会員の皆様がたにおかれてもそうだろうと推察いたします。まだ、はっきり見えているわけではありませんが、コロナとの「闘い」においては、人類の生き方や社会や経済の質の面にも変更を迫る勢いを感じます。

とにかく、コロナ禍の終息まで命を長らえなくてはなりません。電話、メールでは感染しませんので、せめて、体調管理や体力維持に気をつけながら、精神的なケアの意味合いもこめて会員相互のコミュニケーションの拡大を目指していきましょう。そうした試みによって短時間であっても、「日常性」を取り戻し、それぞれの元気を確かめ合ひましょう。できることなら、お互いの専門性に基づき、知恵を出しあい、コロナ後の地球における人類の在りようを総合科学の視点で展望したいものです。この点を強調するならば、今が、学際的な分析能力を有する緑鳳学会の出番だということになるのかもしれません。

近江 吉明 緑鳳学会会長（専修大学名誉教授）